

三四

(豎帳) (表紙)

天明六年 午十一月ヨリ 五番

問屋御用留之写

問屋古代の御達書并御用之写 五番

一方伊奈半左衛門家来
青木時五郎殿
御用

青木文十郎

此老封御奉行所御用之義ニ付、別紙老封一同可被継送候、已上
戌下刻出ス

右御用状、急御用之義ヲ申遣候間、早々遣候様ニと今出屋を以
遣候間、即刻長岡江遣ス、尤無賃

一歩行夫拾五人

一伝馬 老疋

右者右御役人出立ニ成ル、歩伝馬御証文相濟

十一月十四日

十一月十四日
一大廻り棒振り人足八人 九町目迄

右者四人、為御指登ニ相成候ニ付、御目付方々申来候、尤賃錢
濟

一方伊奈半左衛門家来
杉浦五郎衛門殿
青木文十郎殿

杉浦五太夫

石母弥一衛門

建部勘衛門

野村藤介

此状御奉行所御用之義申遣候間、不限昼夜刻付を以早々可被継
候、已上 伊奈半左衛門内 新井孫兵衛

十一月十一日

尚々若途中ニ而見懸候ハ、早々可被相届候、以上

千住 草加 越ヶ谷 粕壁 杉戸

幸手 栗橋 中田 古河 野木

間々田 小山 新田 小金井 石橋

雀ノ宮 宇都宮 祖母村迄

右宿々 問屋中
年寄

一方伊奈半左衛門家来
杉五郎衛門様
青文十郎様 関弥惣次

御奉行所御用之義ニ付、昼夜不限刻付を以、早々可被継送候、

已上

十一月十二日

伊奈半左衛門内

戌上刻

関弥惣次

新城 中瀬 尾島 太田 八木

やなた 天明 ほり木 榎本 生駒

小山 結城 下館 中いつ二(ミ) 夫々順能ク

水戸迄 右宿々 問屋 年寄 中

一囚人三人 此人足六人

但宿才料彦人

右者明十三日朝五ツ時烏山出立、水戸御城下迄罷通候間、書面
之人足用意被可致候、已上

十一月十二日

小山宿 翁助

鳥山 森田 十三日休 給部 八ツ木

同泊 道場宿 宇都宮 十四日休 雀ノ宮

同泊 小金井 新田 十五日休 小山 石橋

下館 夫々順々 水戸迄 同泊 結城

右宿々 問屋 衆中 名主

外ニ状巻通

四通

十一月十七日
一人足拾貳人

右之囚人通りニ付六ツ時寄ル

宿繼を以申入候、先達而囚人召連罷通候先触相送り候得共、日
光道中罷通申候間、其道江者相掛り不申候、人足御用意ニ不及
申候、先達之御用状并先触小山宿迄御繼返シ可被下候、以上

十一月十四日

小山宿 翁助

小山宿 結城町 下館町 順宿々 水戸迄

宿々問屋衆中

右之通昨十七日申来候間、左之通り今日小山宿江申遣候事

以手紙致啓上候、未不得御意候所、弥御安泰ニ可被成御座奉珍
重候、然者其御宿翁助殿之御用状、去ル十七日致当着候処、
最早御役人様中江戸表江御出立被成候間、右御用状、江戸道中
筋へ継立遣候、然ル所右囚人日光道中為御指登ニ相成候趣、翁
助殿之追触昨十七日当着致承知候、右継立候段、乍御世話早速
御通達奉頼候、以上

水戸城下問屋

十一月十八日

木村伝六

小山宿

御問屋様中

此巻封囚人御用ニ付、小山宿へ申遣候間、順々早々、乍御世話
御継立可被下候、以上

十一月十八日

木村伝六

大足宿の 小山宿迄

右宿々問屋衆中

右之通添書いたし遣ス

天明七年未正月ニ成ル

○朱五 上様御事去ル十五日

將軍宣下相濟、御当日の 公方様与奉称候条、其旨可相心得旨今日御達有之候間、支配切可申達候、已上

四月廿一日

○朱二 一馬式疋

台師
瓦師
与八

六

堀 帶刀

右者此度江戸小梅御用ニ付相登候間、来ル廿三日明ケ七ツ時遣候様申遣候間、右之段阿久津左市様江相伺候所、前後稀成事ニ而、重而之形ニも相成間敷候間、先ツ此度者御用御手支ニ茂不相成様、取計可遣候由被仰付候間、遣シ申候事

二月廿一日

○朱 先達而出羽守殿依御下知、上総国ニ而召捕候盜賊とも盜先

為糺、上総・下総・常陸筋江、組与力浜名弥一郎并山田丈衛門、組同心吉田伴蔵、高橋平五郎差出シ、御領分御百性引合等も有之候ハ、差掛り出役先旅宿江呼出、或者御領分中江罷越候義も可有御座候間、此段御達申上置候、御聞置可被下候、以上

未四月

○朱三 後明院様薨御之後、鳴物・音曲・殺生今以御停止之所、於

公儀も最早鳴物有之候而も不苦趣ニ候間、鳴物・音曲之御免ニ相成候条、其旨相心得、尤殺生等ハ今以御停止ニ候間、間違無之様、支配切銘々可申付候、已上

午十二月十三日

右之通今日御達有之候間、其旨支配切可相達候、以上

五月四日

○朱七 追而此触書宿々早々相廻、承之旨別紙請書相添へ、留り宿

々宿送りを以、伊予御役所へ可相返候、以上

近年宿々困窮之上、此節米穀別而高直故、本陣・旅籠屋等賄

○朱四 一未三月十七日問屋場判破候ニ付、今日の改判致候事

方ニ指支及難義候処、諸家其外往来之内ニ者、前前之振合ニ而旅籠錢等相払、旅行之輩も有之趣相聞候、左候而者自然と往来之指支ニも可相成事ニ候、米穀諸品高直之内者其勘弁ニ而、所相場相応之直段を以旅籠錢相払、旅行可致旨諸向江御触出候間、宿々におゐても相心得、所相場相応之旅籠錢者可請取義ニ候得共、右御触ニなずみ、旅籠屋等心得違格別之旅籠錢ねだり取ニおいてハ、吟味之上屹ト可申付者也

五月廿六日 伊予 印
遠江 印

奥州道中

白沢

白川迄

水戸道
佐倉道

共々

但例幣使道

右宿々

問屋

年寄

右御触書老通継立申候間、宿々御大切ニ御取扱、不限昼夜御継送、於白坂宿ニ御披見可被成候、以上

千住宿

問屋

未五月廿六日

草加宿

奥州道中

白坂宿迄 宿々

問屋中

吉左衛門

前書之通御触書成沢村の継来候ニ付、早速御役所様江相窺候処、請書相認長岡村江継送候様被仰付候間、左之通請書相認送り遣ス

此節米穀高直ニ而、本陣・旅籠屋等賄方ニ難義仕候ニ付、所相場相応之旅籠錢者相請取、過分之ねだり等仕候ハ、屹ト可被仰付旨、御触書之趣委細奉畏候、依而御請書奉指上候、已上

未六月八日

常州水戸城下

石田庄兵衛印

木村伝六印

右之通立紙江相認、表江左之通認候

御請書

常州水戸城下

外々宿々の御請書十四通、当所御請書共二十五通、長岡へ送り遣ス

〇(朱)八

屹ト申触候

大学頭様江戸御用米違取合、箱詰ニ而五拾駄奥州守山へ追々

徳田入・太田・田彦通、下御町の長岡・小幡繼為御指登ニ相成候所、甚御指急キ之由御届有之候、尤時々御役人平沢平太夫先触ニ而、宿々繼立候趣ニ有之候間、其旨兼而相心得、問屋着致候ハ、御定之賃錢を以、早々繼送り道中大切ニ可仕旨、屹ト可被申付候、遲滞有之間敷候

一枝川ニ而者、舟渡大切ニ可被申付候

一穀留御番所有之村方者、穀留御番所江相届ケ、罷通候様可被申付候

一小幡ニ而者、平沢平太夫先触と役所の相渡候印鑑引合、駄数遂吟味片倉江可繼立候

右之外道中諸事念入大切ニ取扱候様、問屋等江も兼而可被申付置候、此廻文見届、村下江庄屋致請印刻付を以相廻シ、留り支配役所江可被返候、以上

久方忠衛門代

後藤和十

岡野銀次郎代

高田市蔵

六月十四日

岡村弥左衛門代

藤田平介

寛介二郎代

北條清十

徳田の小幡迄めいく村々有り

右村々 庄屋中

右者当春の大凶年ニ付、急々為御登被遊候由、此上追々御登セ被遊候由、扱々道中甚難渋、何卒此未為御登無之様仕度奉願候、

右御先触早速御役所江入御覽申候

一七月朔日、右守山の此度穀物江戸表江為御登ニ相成候ニ付、

其節印鑑引合繼立可申之旨、御役所様の平沢平太夫殿印鑑壹枚相渡り候事

一馬五拾匹

右者、水戸御用荷物来ル廿九日守山指立、江戸小石川吹上御屋敷迄六日道中積りを以、為指登候条宿々無遲滞馬差出シ可給候、以上

水戸平沢平太夫支配

六月廿六日

柳沼勝衛門印
正直与次衛門

須賀川 矢吹の 棚倉通

太田 枝川の 長岡

千住迄 右宿々 問屋中

右写御役所様へ早速差出ス

一馬五拾疋

右守山御用荷物、例之通御先触御役所様へ写指出ス

六月廿八日

一馬四拾疋

右者守山御用荷物、来ル十九日守山出立之由、御先触例之通取扱申候事

一七月廿日出四郡の又々先達而之通、大学頭様江戸御用米麦取合三拾駄参り候由、御先触例之通取扱申候事

七月廿一日出
一馬式拾疋
わけ拾疋来ル廿三日立
拾疋同 廿四日立

右平沢平太夫殿御先触、例之通取扱申候事

一七月廿三日出四郡々又々先達而之通之文言ニ而、先日都合式
百五拾駄参り候由、御先触例之通御役所様へ写指出す

同廿三日出
一馬四拾八疋
わけ拾疋 当廿五日立
廿四疋同廿六日立
廿四疋同廿七日立

右平沢平太夫殿先触、例之通文言ニ而参り候

八月五日出
一馬四拾五疋
わけ拾五疋ツ、 八月七日立
" " 八日立
" " 九日立

右平沢平太夫殿先触、例之文言ニ而

八月十五日出
一馬五拾四疋
わけ拾八疋ツ、 八月十七日立
" " 十八日立
" " 十九日立

右平沢平太夫殿先触、例之通是又写御役所へ出ス

右御穀荷物数度為御登ニ罷成候間、下御町馬計ニ而ハ甚夕難義
仕候ニ付、上御町馬相願申候所、両日ニ廿五疋相濟候事

以書付申触候

大学頭様江戸御用御廻米、追々為御指登ニ相成候所、先達而御
濟口有之候式百五拾駄之外、又々此度百参拾駄為御指登之義相
濟候間、委細之義者先達而申触候通、駅場・舟渡等鹿抹遅滞無
之、大切ニ相送り候様可被申付候、此配符見届ケ村下江庄屋印
形致シ、刻付を以相廻留リハ支配役所江可被返候、以上

八月廿六日

御用番
徳田ハ 小幡迄

久方忠衛門代 後藤和十
岡野銀次郎代 高田市蔵
寛 介二郎代 北條清十
岡村弥左衛門代 藤田平介

○^九朱

若殿様正四位下少将御官位被 仰出候付、来ル九日
御城ニ而御弘メ被 仰出候、夫ニ付重立候御町人共上着用、
来ル九日御町奉行衆御宅迄参上、御祝義可申上候、以上

十二月六日

右之通罷出、御祝義申上候事

○

去ル十八日

○^朱若殿様御袖留御額直も被為濟候旨、昨日御達有之間、此段
御心得、尤御町人共右御祝義ニ罷出候ニ者不及候間、旁宜御
心得可有之候、已上

十二月廿三日

名主

御町内衆中

方姫様御尊骸、来月六日江戸 御出棺之御振ニ付、左候得者、
来月九日爰許 御通棺ニ相成候条、人馬等之義、前弘ニ可申出
候、以上

正月廿七日

我々兩人江

吉川甚兵衛

阿久津左市

右 御通棺御用人馬等之義ハ、別帳ニ相記シ申候事

一 正月廿八日御町御役所様 御通棺前為御見分御廻り被成候

一 二月五日御町奉行様、此度之御義ニ付、本町通り御見分、御
会所御休ミ也、右両度共ニ例之通罷出候ニ者不及候

一三

○(朱) 一 御合力初御手形、二月四日ニ相濟申候、左之通り

受取申初之事

一 初八表 但四斗二升入

本四町め問屋

木村伝六印

一 初八表 但四斗二升入

本五町め問屋

石田庄兵衛印

右者、問屋役相勤候ニ付、為御合力年々初拾表宛被下置候所、
去丑今暫之内五分一御借上ケニ相成候ニ付、為請取申候、依而
如件

寛政六年寅正月

佐野藤衛門印

拵和角之允印

鈴木長衛門殿

平山蘭衛門殿

○(朱) 一一

一天明八申年今寛政五丑年迄之分卷冊、寛政拾壹未年類焼
と相見江申候、下ケ札ニ而、先々役木村伝六方今相廻不申候
由ニ而、先役左近司長三郎方今申送りニ而、相廻り不申候事

○(朱) 一二

寛政六年甲寅正月

木村伝六

成安

方姫様御疱瘡之処、御養生不被為叶、去ル廿五日御逝去被遊
候ニ付、鳴物・音曲・殺生 若殿様御忌丈ケ、来月十四日迄
日数廿日御停止之事

一 武芸之儀者、御葬穴相濟候迄御停止之事

一 普請之義者、内造作新規取付等之無差別、御一七日御停止、
八日目来月二日今御免之事

但シ御通棺之日も御停止之事

一月並謙訳之義者 若殿様御忌丈ケ御停止之事

右之義ニ付、明廿七日、重立候御町人共、両御町奉行衆御宅江

罷出、御機嫌相伺可申候

一只今今昼夜立番指出シ、尚更火之元大切ニ可申付候、為引候

義者追而可申達候

右之趣、支配切銘々屹ト可申付候、以上

正月廿六日

駒田八十郎殿

右御裏印

伊藤左一衛門

西郷木工 印

福原登助 印

一七
○^朱 一吉川甚兵衛様、先達而閉門被仰付候所、百日ニ付相濟、御役元のことく御勤被成候事

一四
○^朱 一此度

若殿様御痘瘡被為遊候ニ付、御酒湯被為濟候為御祝義、重立候御町人共江戸江参上ニ不及、於爰元ニ明四日、両御町奉行様江罷出、御祝義可申上旨御達有之候、依一同麻上下着用御祝義申上候、御役所様御年寄衆中江も申上候事

三月三日

一八
○^朱 同役丹太一郎義、武衛門と相改候条、此段為心得支配々江可申達候、已上

十二月廿六日

吉川甚兵衛
阿久津左市

一九
○^朱 覚

一五
○^朱 一九月廿九日、下御町与力吉川甚兵衛様、今日急御呼出シにて閉門被 仰付候、扨々大變いかゝ之御次第二候哉

御廻米御急之内、御目付方步行夫、問屋持ニ申付置候処、右御用相濟候条、前々之通步行夫役共取扱候様、旁取扱可被申付候、以上

二月十九日

石田庄兵衛殿 吉川甚兵衛
木村伝六殿 阿久津左市

一六
○^朱 此度、小林兵十郎義、役所口番被 仰付候間、此段為心得相達候、已上

十一月廿日

阿久津左市

右者当春中

公儀ニ而於小金原御鹿狩有之由ニ而、通船相止候由ニ而、先日右之段相達シ御座候処、又々前々之通り今日御達シ有之ニ付、步行夫役共江、是迄之通御証文取扱候様、申付候事

二〇〇

一六月四日夕、小名浜御陣屋へ御飛脚到来、何事哉と今出屋江宿申付候処、当四月廿六日ニ御用状通り候哉尋に付、庭帳吟味致候所、長岡江繼立候、然ル所長岡駅へ受取書付取不申、尤其節詰夫三間町弥十二候間、弥十相尋候処、其砌指合有之、肴町左吉江相頼候よし、依而左吉相尋候得者、烏山領京野村へ罷越居候嘉兵衛と申者相雇遣候由、然ル所右嘉兵衛義其砌へ行衛相知不申候よし、依之右兩人長岡駅江糺シニ遣候所、一向相届キ不申候由、甚以驚人候、右之段致方も無御座、御役所様へ口上書を以申上候処、何レニ茂三郎衛門小名浜江罷越、内濟取扱候様被仰付候処、吾人ニ而者安心無之、同役義者老人故步行相成不申、拙者義者商用願之上湯破江入湯ニ罷越、然ル処三郎衛門湯破迄相廻り、是悲拙者も罷越候様申候ニ付、湯破六日ニ出立小名浜江罷越候、尤拙者ハ岩城平江八日ニ着、段々小名浜之様子も承り候所、一向ニ呼出シも無之、兎角江戸表御代官寺西様へ、御町御役所様へかけ合候様指図モ有之候間、平表出立十三日ニ帰着、早速ニ翌十四日、三郎衛門同道ニ而御役所様へ申上候処、何連ニも欠合可申由ニ而、早速恐入申立候得とも、先ツ其義ニ及不申候由ニ而、暫相過キ申候、然ル所同廿三日、小名浜へ又々御役所江飛脚参り候、右之御挨拶此方様へ被仰越候由ニ而、飛脚之衆廿五日朝出立、同廿八日此方様へ御中間衆兩人御遣シ被成候、

右之段小名浜へ江戸表江御運ニ相成候よし、扱々御苦難ニ罷成奉恐入候、何卒少しも輕ク相濟候様願居申候、余ハ追而記し可申候

二二〇

○当十九日於江戸ニ伊藤孫兵衛殿御町奉行被 仰付候ニ付、其旨可相心得候、尤未御下り日限者不相分候ニ付、尚又追々可相達候条、其節御祝義ニ者罷出候様ニ可相心得候、已上

六月廿一日

吉川甚兵衛
阿久津左市

二二二

○八月廿二日朝急御呼出し之所、盆前へ御苦難ニ罷成候小名浜御用状間違之義、別紙之通被 仰付候、尤拙者ハ病氣ニ付松物町与之衛門相頼指出申候

問屋
石田庄兵衛

同
木村伝六

当四月中、小名浜御陣屋御用状、本三町目三郎衛門方ニ而、間違之義ニ付、先達而恐入申出候ニ付、先ツ不及其義旨達置候所、畢竟常々三郎衛門江申付不行届故之義と相見、伝六義

者其節月番ニ付、旁不念之至ニ付呵押込置、庄兵衛義者呵捨ニ申付候条、其旨可相心得もの也

本三町目

三郎衛門

其方儀、問屋代繼所ニ相立置、常輪往還御用向ハ持切相動候処、都而宿繼御用之分ハ、先方問屋ニ請取之ニ札取置候、兼而行ニ付、当四月中小名浜御陣屋ニ御用状、賃銭共ニ添、長岡村江継送り、右一札可取置筈之処、尤其節瘡疾ニ而取臥居候砌ニ付、脱落仕甚恐入之由申出候得共、其後暫ク日数も有之候得者、其内ニ者可存付候所、無其義先方ニ糺迄不心付、等閑ニ罷在候始^{（マ）}、旁以不調法至極ニ付、閉戸申付候条、屹ト相慎可罷在もの也

田中町内

三間町

弥十

肴町

左吉

当四月中、小名浜御陣屋御用状、賃銭共ニ長岡村問屋江屹ト可致持参旨、本三町目繼所ニ弥十申付候所、指合出来候由ニ而、左吉方江代人雇呉候様相頼候ニ付、左吉より近頃下御町江罷越居候日雇取、烏山領京野村出生嘉兵衛と申者を雇遣候由、件之通初発弥十義長岡迄屹ト相送り候様申付り、指合出来候ハ、慥成ル者頼可指遣候所無其義、追而右雇人長岡ニ罷帰候否も不承罷在、尚又左吉義者弥重ニ代人被頼候ハ、賃銭添へ候御用状之義ニ付、別而入念入、慥成者相雇差遣、

帰程も早速可承候所、是又無其義罷在候段、兩人共ニ旁以不調法至極ニ付、嚴重ニ可申付候所、甚夕用捨を以禁獄申付候条、屹ト相慎可罷在もの也

右之通被 仰付、甚恐入相慎罷在候所、同廿五日朝、御役所様江拙者御呼出シニ而御免ニ罷成、存之外日数も無御座、重々難有仕合ニ御座候、直ニ恐入申立候処、不及其義由ニ付、直ニ御礼廻り仕罷帰候、三郎衛門義者、日数十日ニ而御免、弥十・左吉義ハ、日数十五日ニ而御免ニ罷成、難有事共也

木村伝六

其方儀、先達而申渡候通之不調法ニ付、呵押込置候所、令免許候条、以来念入可相勤者也

二三

○^{（朱）}十月廿五日

一馬一疋

細谷天性院迄

石川久次平

右者今夜九ツ時可遣候
右之通申来候所、郷分江者都而指出不申候間、御役柄承候所、御徒目付之由、依而右之段御役所様江相伺候所、御目付方部類江ハ差出候筈ニ候間、右之趣相心得、此上共ニ差出候様被仰付候間、遣シ候事

二四

○^{（朱）}一人足式人

山駕籠老挺

白川殿役所

佐々木監物

右者吉田大宮司江御神用ニ付下り被居候所、江戸表江被登候ニ付、先触指出吳候様申遣候ニ付、御役所様へ相伺候所、稀成義ニ付、指出可然用御達ニ付、指出候事

二五
○^朱 去ル十一日

殿様中納言御転任被 仰出候旨、御達有之間、重立候御町人江戸江参上ニ不及候条、明十五日五ツ半時、麻上下着用例之通罷出御祝義可申上候、以上

十二月十四日

二六
○^朱

吉川甚兵衛様、今日吟味役ニ御役替被成、御買物奉行兼職被 仰付候、早速罷越御祝義申上、夜四ツ過ニ相引申候、其外八翌廿日御祝義ニ罷出候様、名主方々廻状指出候事

十二月十九日

寛政八丙辰年

二七
○^朱

尚々当時八五間町中山半衛門屋敷ニ有之候、早々相廻、留り可返候、以上

今日、桑名重郎衛門、吉川甚兵衛跡御町与力被 仰付候間、支配々江可相達候、已上

二月廿一日

三月十四日、鼠町御役屋敷へ御引越被成候

二八
○^朱

一当山 御再興諸国巡行勸化之義者、蒙 繪旨

台命万機畢等結縁と申御趣意有之、從

公儀も御銀被下置

御免状ニも其分限ニ応シ寄進すへきもの、御文言有之、

至而重キ

御趣意ニ候間、此段可被相心得候、已上

誓願寺

役者

覚

一御趣意状巻通

一御両かけ 但人足式人

一書翰巻通 留り村江

右者人足無滞様御指出継送り可給候、此段頼入存候、已上

京本山誓願寺役人

小沢桂輔

永井栄介

大塚村

赤塚村

水戸上町

右村々御役人中

右者今日八日五ツ時大足村出立ニ而、水戸町方迄罷越候間、書面之人足無滞御指出継送り、指支無之様頼入存候、以上

辰六月八日

未得御意候得共、一筆致啓上候、先以貴家無御別条被成御達珍重ニ存候、然者此度当国江巡行罷下り候間、御世話頼入候水戸様義ハ、御奉納相濟候得共、道順不勝手ニ御座候由、其御町方江相懸り候間、乍御邪^悪广上下式人罷越候由、止宿之所御頼入存候、右之段申置度早々以愚筆如此ニ御座候、以上

京本山誓願寺役人

小沢桂輔

永井栄介

六月六日

水戸上町

御役人中

右今出屋権十所へ宿申付、宿賃并人足賃錢等受取、九日夏海江継送り申候

右者今朝九日水戸下町出立ニ而、松川村迄罷越候間、書面之人足無滞御指継送り、指支無之様頼入存候、以上

夏海村 松川村迄 右村々 御役人中

外之番状老通
人足老人

右之通夏海へ遣ス

二九

○^朱

一本町裏町出人高并兩年幾廻り出候哉之旨、相分り候ハ、書出候様、御役所様へ御達ニ付、左之通書上候事

本町通出人高

- 一六拾六人 台町 一十九人半 七軒町 裏老式町目
- 一十三人 本老町目 一十六人 本式町目
- 一十五人 本三町目 一十三人 本四町目
- 一十七人 本五町目 一十三人 曲尺手町
- 一三十老人 八九十町目 一七十人 下新町
- 一十四人 赤沼鍛冶町 一十六人 白銀町
- 〆三百三人半 内三拾式人程 十人組頭役引 老ケ手四人ツ、引
- 残り式百七拾老人半

裏町通出人高

- 一式拾七人 紺屋町 一拾三人 江戸町
- 一拾人半 松物町 一拾四人 裏三町目
- 一十三人 肴町 一十人 裏四町目
- 一式拾五人半 田中 三間町 一十八人 かミ町
- 一拾老人半 裏五町目 一六人半 志目町
- 一拾五人 裏六町目 一十三人半 裏七町目
- 〆百七拾七人半 内拾九人程 十人組頭役引 老ケ手四人ツ、引
- 残り百五拾八人半
- 本町通^{寅年分} 一廻り人足 四廻り 一詰^同歩行夫 八廻り

ノ十式廻り

但年ヲ越、町ニ而ハ十三廻り御座候事

一大廻り人足 三廻り 一詰歩行夫 七廻り

ノ十廻り

右同断

一裏町通り 十四廻り 一同 十三廻り

同断

同断

右者、本町・裏町通出入高并廻り高、寅・卯兩年分、御尋ニ付書上申候、已上

辰八月

木村伝六

石田庄兵衛

三〇
○(朱) 去ル十五日

若殿様中将御官位被 仰出候旨、只今御達ニ付、明十九日五ツ時、麻上下着用、両御町奉行衆御宅江罷出、御祝義可申上候、此旨一支配切早々可申達候、以上

寛政八年辰十二月十八日

三二
○(朱) 覚

一人足式拾人 但シ老人子供相除キ丈夫成者

右此度蘇鉄為御登ニ付、来ル十一日明ケ六ツ時、七軒町なばや九兵衛宅迄、刻限無間違被指出候様、御町方江御断被成可被下候、已上

五月九日

御普請方

右之通鼠町御役所様より御達有之候、乍去十一日者相延、十二日ニ為御登ニ相成候、尤先達而高野屋宗兵衛所々、杉為御登ニ相成候節、本町持出人足々差出候間、此度も本町江人足当テ指出シ候事 寛政九年己五月十二日

三二
○(朱)

一二月七日出立ニ而勢州表江罷登り、夫々大坂表江相廻り、五月十九日無難ニ帰国仕候、尤日数七十日相願罷出候所、用向相弁不申、廿日之日延相願候所、百一日相掛り候間、下り延引之段申立候所、無何義相濟、翌日出勤仕候事

寛政九年己五月

三三
○(朱) 一石田庄兵衛義、当三月頃々病氣ニ而、当月廿四日相果申候、何卒跡役はやく被仰付候様致度御座候

三四
○(朱)

一下御町与力阿久津左市様、六月十九日御達御用ニ而御呼出シ、御城代与力ニ被 仰付候、跡御役南御郡方々坂場与蔵

様と申平手代々被 仰付候、早速御祝義ニ罷越し、阿久津様へ者翌朝罷越候事

長岡村御問屋

中内銀重様

東ヶ崎定之允様

三五

○^朱

一六月廿一日、石田庄兵衛孫庄三郎御用之義有之、御役所江御呼出ニ而、庄兵衛跡問屋役被 仰付候、猶又三口金掛りも庄兵衛同様被仰付候事
右庄三郎江被仰付候義、枝川・長岡江も文通致候事

三六

○^朱

一問屋場繼所之義、暫ク本三町目三郎衛門方ニ而、兩所分一ヶ所ニ而繼立候処、先手之通式ヶ所ニ而、繼立申度由、先達而願出置申候所、弥相濟申候由ニ而、我々兩人閏七月廿五日御呼出ニ而被仰付候、尤本五町目繼所之義者、仁左衛門江相頼申度段、願申出候所、是又願之通相濟候間、長岡并枝川村江も左之通文通致候事
以手紙致啓上候、未残暑退兼候得共、弥御揃御安康ニ可被成御座奉珍重候、然者繼所之義、近来本三町目一ヶ所ニ而繼立候処、先年之通此度式ヶ所ニ而繼立候様被仰付候間、此段左様左様御心得可被申候、右得貴意度、如此ニ御座候、已上

下町問屋

壬七月廿六日

枝川村御問屋

小沢伊介様

木村伝六

石田庄三郎

三七

○^朱

一御町方御役所十月四日御引替ニ相成候、上町ヶ小林市衛門様、下町ヶ桑名重郎衛門様、尤御引越者近而之由、早速罷越申上候事

三八

○^朱

今日、伊藤孫兵衛殿御先手物頭被 仰付、右跡近藤五三郎殿御町奉行被 仰付候間、其旨可相心得候、尤右御祝義例之通御屋敷江可罷出候、已上

巳十二月十九日

小林市衛門

坂場与蔵

三九

○^朱

大和田小八郎義、今日御町与力被 仰付候条、其旨相心得可申候、以上

寛政十年午八月十六日

小林市衛門

同役坂場与蔵、御買物役格大吟味方勤被 仰付候間、為心得相達候、已上

同 六月廿九日

一此度神藤三郎義、口書ニ転役ニ付、此段心得ニ相達候、以上

同 八月廿五日

小林市衛門

大和田小八郎

右之通其時々早速御祝義ニ罷越候

一小宮政五郎殿、内物書ニ被 仰付候間、祝義ニ罷越候

○^未 一歩行夫役利兵衛義、九月九日寺社役岡本源衛門様より御証文人足申来候間、例之通と相心得、押切遣候所、是迄押切

候義相覚不申候由、御屋敷様御尋御座候間、利兵衛罷越、押切候趣相答申候由、依而右之段御屋敷御町方江御掛合御座候間、利兵衛御糺シニ罷成候処、定御証文江者押切不申候由ニ付、依而利兵衛恐入申出、猶又三郎衛門義も其節月番取扱之時分故、御証文江者拘り不申候得共、是又恐入申立候処先ツ不及其義候由、尤本七町め名主新衛門義も、伝馬江同様押切候間、恐入申出候由、追而新衛門・利兵衛兩人御呵ニ付、恐入申立三日ニ而相済ミ申候、三郎衛門義者、其節居合候間、年寄衆も重而心を付候様ニと咄御座候由、是ハ無阿相済申候、重而心得可申事

寛政十年午八月

○^未 四一 戸田采女正殿三阿弥を以 御城付共江、一紙ニ而御渡候御書付之写

前々ニ見合銭相場下直之上、諸色之内高直之品々も在之、宿々

及難義、人馬繼立指支候趣意も相聞候ニ付、東海道者品川より守山迄并佐屋路共ニ、来未正月来辰十二月迄拾ヶ年之間、人馬賃銭船賃共ニ式割増、中山道者板橋守山迄并ニ美濃路共ニ、日光道中ハ千住鉢石迄、但 例幣使道・壬生通并 御成道、其外水戸・佐倉道共、甲州道中ハ内藤新宿下諏訪迄、奥州道中ハ白沢白川迄、右東海道ニ准シ、是又来未正月来辰十二月迄拾ヶ年之間、人馬等賃銭壹割五分増銭請取候様、右宿々江申渡候間、可被得其意候

午十一月

右之通相触候間、可存其趣候

右之通、今日御目附方達有之候間、其旨相心得可申旨支配々江可申達候、以上

寛政十年 午十二月朔日

乍恐以上書奉伺候

一此度道中人馬賃銭打続銭下直、諸色高直ニ付、壹割五分増公儀御触御座候処 御城下付出し并通並人馬賃銭共ニ、御触之通壹割五分増ニ為請取、可然御座候哉、近年諸色高直之上、銭下直ニ而人馬共ニ甚々難渋仕候間、御故障も無御座候ハ、御触之通増銭為請取候様被 仰付被下置候ハ、我々共迄一同難有仕合ニ奉存候、此段奉伺候、以上

石田庄三郎

木村伝六

午十二月

御町御役所様 右十二月九日差出し申候

道法里式里半 小鶴 石塚 磯浜

岩舟 飯富 成沢

四二
〇十二月十九日御町奉行佐野藤衛門様御用ニ而 御登城御

養子御願之通相濟、依而翌廿日、名主以上御祝義ニ罷出申候、
安藤内匠様御次男之よし

四三
〇一寛政十一年未正月朔日、去年中伺出候道中駄賃壹割五分

増之義、伺之通相濟申候、太賃割左之通

道法式里四町 長岡

付出し分 下御町
長岡迄
一八拾四文 同断本馬 此増錢拾貳文六分 百壹文

一七拾文 同断蛇付 此増錢拾文五分 八拾壹文

一五拾六文 同断輕尻 此増錢八文四分 六拾四文
一四拾貳文 同断人足 此増錢六文三分 四拾八文

道法壹里貳丁 枝川 青柳 勝倉

付出し分 下町
右村江
一六拾三文 此増錢九文四分 七拾貳文

一四拾貳文 同本馬 此増錢六文三分 四拾八文

一三拾五文 蛇付 此増錢五文貳分 四拾文

一貳拾八文 輕尻 此増錢四文貳分 三拾貳文

一貳拾壹文 人足 此増錢三文壹分 貳拾四文

道法里三里 奥谷 夏海 鯉淵

付出し分 下町
右村江
一八拾四文 此増錢貳拾七文 貳百拾五文

一七拾八文 同輕尻 此増錢拾壹文七分 九拾九文

一六拾文 人足 此増錢九文 六拾九文

道法三里半 大足

付出し分 下町
右村江
一貳百拾八文 此増錢三拾壹文五分 貳百長五拾文

一四拾四文 同本馬 此増錢貳拾壹文 百六拾五文

一三拾拾文 同蛇付 此増錢拾七文四分 百三拾七文

一三拾壹文 同輕尻 此増錢拾三文六分 百九文

一七拾文 人足 此増錢拾文五分 八拾壹文
右之通御役所様江も書上申候

四四
〇若殿様御妾腹ニ先達而若子様出生被遊

榮之丞様与奉称候、右之趣 公辺江も被 仰達候、此段可奉承
知旨被 仰出候事

但右之趣支配江も可相達候事

右之通月番御年寄衆の近藤五三郎殿江御達有之候間、此旨可承
知候、尤奉承知候迄二而、御祝義申上候二者不及候間、其旨相
心得、支配切銘々無滞可相達候、已上

三月廿三日

小林市衛門

大和田小八郎

四五

○榮之丞様御儀

若殿様御嫡子被遊度段、此度

公儀江被 仰達候処、去ル廿五日上使を以御嫡子ニ被 仰出候、
依之

鶴千代様と従

殿様御名被進、右之段

公儀江も御達被遊候条、其旨奉承知、

鶴千代様と可奉承知旨被 仰出候条、重立候御町人、例之通麻

上下着用明廿九日罷出、御祝義申上候様、支配切早々可申触候、
以上

寛政十一未年 三月廿八日

四六

○今日佐野藤衛門殿、寄合指引格ニ被 仰出候間、御町人共

御宅江参上、御祝義申上、猶更支配切銘々可申触候、已上

未 五月四日

小林市衛門

大和田小八郎

四七

○道中人馬賃錢増之義、先達而 公儀御触も有之ニ付、御領

内人馬賃錢増之義、先達而相濟候処、江戸道中ニおゐても、片
倉の小金迄ハ増錢無之趣候間 御領内之義も増錢相止メ、是迄
之通賃錢相請取候様ニ御達可有之候、已上

五月廿一日

小林市衛門

木村伝六様

大和田小八郎

四八

○一七月十七日夜丑ノ下刻、紙町鍛冶屋小衛門裏屋の出火、

折節北風烈ク田中町新店迄不残、夫の瓦屋江飛火、此火先キ

紺屋町夷屋六衛門隣迄、紙町を裏四町目・肴町・裏三町め・

檜物町迄、江戸町山城屋四郎平隣まで不残、又紙町を風上、

裏五町目不残、塩町片側不残、片側者御塩屋四郎衛門残り、

又本四町目不残、本三町目南側不残、北側白銀屋元屋敷隣迄、

紙町者加藤善九郎の、残り本五町目石田庄三郎計残り、右ニ

付長岡・枝川両村江、人馬通シ次キ之義頼遣申候、扱々近年

無之大火、問屋場も両所共ニ類焼ニ付、問屋宅ニ而繼立申候
右かけ合御達等別帳ニ仕立置申候

四九

○此度類焼之者共江、普請金式千両拜借被 仰付候ニ付而者
別而御仁惠之程、難有存弁、此上御町並随分取賄、本町通相応
ニ相暮候者共ハ、塗屋或者瓦家上ニ致、其次不行届者共ハ表通
是悲ニ階作ニハ家作致候様、可相達旨被 仰付候間、支配々不
残様得卜御達可被成候、已上

七月廿八日

五〇

○一本志町目江宿屋拾貳軒相濟、志軒江飯盛女式人宛、其上
鳴物等も勝手ニ相濟申候、其外芸者等大芝居千波夜舟色々御
免ニ相成、次第々々大賑合、江戸同様ニ御座候

五一

○乍恐以書付奉願上候事

一往還問屋場之義、先年者家作之義奉願上、御材木頂戴仕申候
処、近年商家作之尽ニ而相勤申候間、往來之旅人問屋場相訊
り兼、指支ニ罷成、其上
御城下不相応ニ乍恐奉存候、依之先年之通、御材木奉願上可
申奉存候所、御時節柄奉恐入申候間、差扣罷在、尤我々共自
分家作ニも仕、相勤可申筈ニ御座候得共、近年打続不世柄ニ

而甚不商内、問屋場家作迄ニ者相届キ不申罷在候、然ル所此
度出火ニ而両問屋場類焼仕、往來御用繼立ニも甚指支難渋仕
申候、早速如何様ニも家作仕、御用相勤申度奉存候所、我々
共義も類焼仕申候上、抱屋敷数ヶ所消失仕、繼所家作迄ニ者
急ニ者行届兼、甚以難渋仕申候、此度莫太之御救金をも被下
置候上、重々奉願上候義奉恐入候得共、何卒他所問屋場同様
ニ家作仕、御用相勤申度奉存候間、御慈悲之御了簡を以、御
材木ニ而成共、又者年賦拜借金、兩様之内ニ而奉願上候、右
拜借金御濟口被 仰付候御義ニ御座候ハ、金拾五両拜借仕
度、一同偏ニ奉願上候、依而如件

寛政十一年末八月

石田庄三郎

御町御奉行所様

木村伝六

右八月十八日御役所へ差出シ申候

五二

○公儀御医師橘宗仙院様、中湊江御出被成候ニ付、大廻り
人足指出ス 九月八日

五三

○一去月中願指出置候問屋場拜借之儀、九月九日ニ相濟
覚

金拾両也

右問屋場普請ニ付奉願上候処、此度別段拜借被 仰付候、御金

之内五分利付十ヶ年賦ニ拝借相濟、難有仕合ニ奉存候、来申
暮今年々無遲滞御上納可仕候、已上

未九月

石田庄三郎

御町御役所様

木村伝六

右上下御礼廻り致候、利足ハ八月ハ指出候様被 仰付候

五四

○(朱)一人足拾人

一輕尻式疋

右者此度 公儀御医師橋宗仙院殿、明後廿日朝本老町目会所御
出立、鉾田迄通行被致候間、前書人足少茂無滞可被指出候、已
上

九月十八日

水戸吟味方

鬼沢与左衛門

下御町ハ 夏海

茂見山

鉾田迄

於鉾田ニ鹿嶋舟用意致シ、屹ト御不自由無之様支度心掛可被取

計候、以上 右村々 問屋中

庄屋中

一人足拾四人

一馬 式疋

右者橋宗仙院様御出立ニ付、明廿日曉七ツ時本老町目御会所江
指出候様、小林市衛門様より被 仰付候、尤御証文ニ相成候由
馬ハ穀町江申遣ス 人足台町より

九月十九日

五五

○(朱)

一未十月四日夜四ツ時、本六町目治郎三郎・義平治裏ハ出
火、折節北風強ク、塩町江吹出、又々七月通り風上へ焼、本
六町目不残、本七町め南側不残、北側中屋長三郎迄、塩町・
裏六町目五六軒、本五町めも釘庄焼、漸夜八ツ時鎮火致候、
兩度之大火、難渋之事ニ御座候、此度も拝借金相濟申候、五
日ハ手前江問屋場引申候、長岡・枝川江文通
態々以手紙致啓上候、寒冷弥増申候所、弥御安康被成御座奉
賀候、然者昨夜六町目ハ出火ニ而、表裏下筋迄類焼致候ニ付、
度々申上兼候得共、人馬繼之義、少シ之内其駅より先駅迄、
御繼立被下候様奉願上候、右得貴意度、早々如斯ニ御座候、
已上

十月五日

尚々は迄五町め庄三郎方ニ而繼立候処、此度類焼致シ、猶又
先達而類焼致候馬役共之内、此度又々類焼致候間、旁以指支
申候間、無據御頼申候義ニ御座候、以上

枝川より返書

御書面致拜見候、如仰寒冷相催候得共、弥御安泰ニ可被成御
座候半奉賀候、然者昨夜之出火嘸御騒等被成候半御難渋之段
奉察候、就夫駅繼先駅江引通シニ、少之内御頼被仰下御尤ニ
奉存候、乍去何日と申日限等無之、永々之義村内痛ニ相成候
ニ付、相成不申候、御難渋之砌ニ御座候得者、一兩日ハ引通
シニ取扱可申候、長々之義者、御答ニ及兼申候、先前文之通、
貴答如斯ニ御座候、已上

十月五日

枝川問屋

小沢伊衛門

我々兩名

長岡ハ村内江相談之上、此方ハと口上ニ而御座候

長岡駅ハ引通之義返書

態々以手函致啓上候、昨日者御書面ニ而驚入申候、扱々御難義奉察入申候、然者往還人馬継立之義、此方相談仕候処、時節柄と者乍申御類焼之砌、無據御指支と存候間、今日ハ十日迄当宿ハ枝川迄為通候様申付候間、左様思召可被下候、尤先触之義者其表ニ而御繼被成候様御心得可被下候、右之段得御意度、如斯ニ御座候、已上

十月六日

長岡宿問屋

下町御問屋

中内銀重

木村伝六様

東ヶ崎定之丞

石田庄三郎様

以手紙啓上仕候、寒冷ニ罷成候得共、御家内様弥御安康ニ可被成御座候旨、奉賀候、然者出火ニ付、宿継長岡通し候ニ任御頼取扱申候、然所村内相痛候ニ付、難義之趣申出在之候間、依之明日ハ其御町江為付送候間、左様思召可被下候、右之段得貴意度、如此ニ御座候、已上

十月八日

枝川

小沢伊衛門

御町問屋

木村伝六様

石田庄三郎様

右返書

御手紙致拜見候、如仰寒冷ニ罷成候得共、御揃弥御安泰ニ被成御座候由、奉賀候、然者此度出火ニ付、駅継之義御頼申候所、早速御承知、今日迄御繼通被下、忝仕合ニ奉存候、然ル所、御村内御痛ニ罷成候間、明日ハハ当駅江御繼立被成候趣、被為入御念承知仕候、尤先日一同長岡江も御頼申候所、十日迄ハ御繼立被下候筈ニ御座候間、重々御頼申兼候得共、右日限迄御引通被下候様、奉頼上候、右之段無據御頼申候事ニ御座候、先者右貴報迄

十月八日

両銘

小沢伊衛門様

五六

○未

乍恐口上書を以奉伺候

此度本志町目江他所ハ引越罷越候宿屋共之義、御金荷御宿申付候而も可然御座候哉、猶又合宿之義、相成不申候由、才料衆ハも申聞御座候所、此度罷出候宿屋共之義ハ、次第茂相違申候事ニ御座候得者、相伺奉申候、右等之宿屋江者、種々之者共も入込罷在申候間、万一之義御座候而ハ、御苦難ニも罷成申候御義ニ乍恐奉存候、此段奉伺申候、已上

未十月

石田庄三郎

御町御役所様

木村伝六

乍恐口上書を以奉願上候

一公儀御金荷御町泊りニ罷成候節、御金入置申候櫃式ツ拵置申度奉存候、万一出火等之節、用心ニ仕度奉存候、猶又右等之砌、我々付添へ罷出候節、御用高張壺ツ為持申度奉存候、右兩様入用何卒被下置候様、偏ニ奉願上候、已上

未十月

石田庄三郎

御町御役所様

木村伝六

此間御申出有之候、御金荷入候箱、於此方ニ申付候条、鉄物計一兩日之内ニ御廻シ可在之候、直ニ為打可遣候、以上

十一月二日

小林市衛門

木村伝六殿

大和田小八郎

尚々ぼんぼりハ御金荷之節ニ限り候と御心得可在之候、以上先達而被申出候本志町目宿屋共江 公儀御金荷宿之儀者、本志町めニ宿屋拾式軒、余町ニ九軒、都合下御町中ニ宿屋式拾壹軒ニ相成候ニ付、都而廿壹軒之宿屋江廻リニ御申付可有之候、乍去他領引越来居候宿屋共ハ、其訳不存義と相見江候ニ付、克々呑込候様ニ可申合置候

一御金荷泊り等之節、万々一出火等と申候節、高ぼんぼり為持各付添候義、猶又御金荷入置候箱共ニ相濟候間、其旨御取計可有之候、ぼんぼりハ左之通り認宜候

片側江 御用

片側江 御町方

右之通可認候、尤文字大振ニ認候而宜候間、其振を以為拵可申候、以上

十一月四日

小林市衛門

木村伝六殿

大和田小八郎

右之品々早速拵、代料追而仕出シ可申候事
一本志町目江此度他所引越候宿屋共左ニ

大和屋伴蔵

吉野屋喜兵衛

小松屋龍衛門

喜野字屋喜三郎

玉屋勇吉

巴屋仁兵衛

鶴屋卯兵衛

下野屋吉兵衛

ノ八人

外ニ是迄之分

佐渡屋清左衛門

内田屋常衛門

白木屋利衛門

右之者共飯盛有り

立原屋利兵衛

右都合拾式軒也

五七

〇(朱)

口上覚

一裏町通歩夫出人之儀、百七拾人余ニ而、順々相勤候所、近年歩夫役四人江右之内式拾人分請取之義、御見濟ニ罷成、残り百五拾人余之内、十人組頭一ヶ年四人宛之役引式拾五六人引、残り百式拾人余ニ而御証文人足并御先触分人足等相勤申候処、此度裏町通過半類焼仕、一統難義仕候間、何卒歩夫役共江御見濟ニ罷成候式拾人分請取、錢二十貫文、何れ之御金成共被下置候様ニ罷成候ハ、誠ニ裏町一統江之御救ニ罷成可申、乍恐奉存候、猶又、出人茂一ヶ年二者式百人余も相違候様ニ罷成、裏町一同難有仕合ニ奉存候、乍去右式拾貫文丸ニ御引

御町御役所様

上ケに罷成申候而者、歩夫役共一同難義仕可申奉存候間、何卒前件奉申上候通り、是迄之通之鏝高被下置候様仕度奉存候一裏町通歩夫役遣候所、町々ニ不届之町も御座候哉ニ而歩、組頭江歩夫役遣候所、町々ニ不届之町も御座候哉ニ而歩、夫役共へ為相任為当候義も御座候様ニ承知仕候、畢竟右等ニ為取扱候間、廻り不順出来、一統之帰服も無之様奉存候、依之上は支配タニ而一町切ニ直々申付、尤裏町通・元町江間屋場通帳屹ト押切致シ、歩夫出人者人切ニ名前相記シ、一町出払候ハ、元帳次町江相送り候様、裏町名主・組頭共江得ト被 仰付被下置候様、乍恐奉願上候

一問屋場江相詰申候詰夫之義、先年今日々本町々四人宛相詰、誠ニ不時往来継立申候、右四人之内、両三人も召遣イ候節ハ、跡詰為致来候処、台町・下新町支配其外、外も打統不世柄故一統相傷候上、此度三四五町目類焼仕、甚以難渋仕候間、来申正月々五ヶ年之間、是迄四人宛相詰候分、日々三人宛ニ仕可然哉と愚慮仕、御内々奉申上候、乍去右之内両人も召遣イ候節者、只今迄之通り早速跡詰為致申度奉存候間、右之段本町名主江も、乍恐得ト御申合被下置候様奉願上候、日々老人宛出人相減申候而茂、老ヶ年二者三百六拾人程相違イ申候、尤此上往来格別相過候義も御座候ハ、又々四人宛ニ御願可申上奉存候間、何卒右之趣ヲも本町名主共江御達被下置候様奉願上候、以上

未十二月

石田庄三郎

木村伝六

歩行夫役共裏町歩行夫人足式拾人請取見済之義、来申年分々相止メ、御救金吉人江三分式朱宛被下候様ニ相濟候間、此段得御意候、尤右御救金ハ正月中ならでハ相渡不申候ニ付、夫迄金式両式分式朱、当晦日迄ニ御指替候様ニ致度候、且問屋場詰歩行夫之義も先ツ三人宛ニ相成候間、此段旁得御意候、已上

十二月廿八日

上田作十郎

木村伝六殿

五八

○(卷)

一此度御町御役所上下共ニ御評定所江引申候、尤毎日四ツ時々ハツ時迄、御一同ニ御出張ニ罷成候、委細左之通り

一此度役所一同評定所江日勤被 仰付、我々不残并口書内物書共来月朔日、四ツ時出仕八ツ時退出ニ而、尤不依何義、御用筋都而評定所役所江指出候様、可致事

但御町奉行衆ニも、日勤御同様出仕被致候事

一上下御町諸願者不及申、諸訴或ハ内意等申出候義も是迄ハ右を始、町役人共々我々月番宅江申出来候所、評定所江日勤被 仰付候上ハ、已来評定所役所ニ限り指出シ、宅江申出等ハ取受ケ不申候、尤我々月番上下ニ而老人宛勤来り候処、向後月番老人ニ相定、上下御町之御用、諸願・諸訴又者内意等ニ

至迄、都而右月番評定所役所ニ而取調候間、其旨相心得可申事

但下町ニ而月番勤候節者、上町ニ而加番老人相立、上町

ニ而月番勤候節者、下町ニ而右同様相立候間、夜中等誠ニ指懸リ無余義事ニ而、明日迄難指延程之御用筋之義者、旨儀ニ右月番加番之宅ニ而取受候間、其旨心得違無之様相心得可罷在候、乍去訴之品ニ右明日ニ而

も宜義ヲ致指略、宅々江訴出候而者、其品取受ケ不申事

附り

四九之御寄合、御一同御城江出之事

一都而之申渡并尋事等共ニ、以來評定所役所にて取計候事

但附添之町役人之外、送り迎之者一切不罷出様、可申付候、

若相背罷出候者ハ、可為越度事

一間口直シ人別改等、是又評定所ニ而取計候事

但間口直シ御礼之義者、評定所役所ニ而申上、其外相廻

り候義、用捨之事

一御町人共、諸願等相済候礼、不重立義者、翌日評定所役所江申上、其外相廻り候義、用捨之事

一重立候御祝義、年頭五節句、年寄役ニ成并問屋・名主立替等之節ハ、是迄之通御礼廻り可相勤事

但シ組頭以下申付候節ハ、評定所役所江御礼迄ニ而、

其外相廻り候義、用捨之事

一役所不殘評定所ニ御用席相建候上ハ、是迄御町奉行所、并我々

宅江火事馳着人足之義、以來左之通り申付候条、無高下割合、残人之義ハ、火事場出人之内江組入候様可致、尤左之通相成候上者、少シも無遲滞驅着候様、屹ト可申付置候、且割合出来次第、書付ニ而可申出候

覚

評定所江駆着人足 式拾人

兩御町奉行衆御宅江 七人宛

上下我々宅江 四人宛

右之通割合、残人之義者前書之通出人江組入候様ニ可取計候

寛政十二年庚

申三月

右三月廿八日御達し

小林市衛門

大和田小八郎

五九

○殿様御実母様御急症ニ而御遠行被遊候ニ付、左之通 知仙

院様御事御急症ニ付、一昨十七日御遠行被遊候処、右ニ付重立候御町人、江戸江不及參上ニ、例之通兩御町奉行衆御宅并我々

月番宅江計罷出

御機嫌相同候様可仕候、尤右之御義ニ付、左之通御停止触有之候間、其旨相心得候様、支配切銘々可申達候、已上

五月十九日

御停止触左之通

一鳴物・音曲・殺生并目当鉄炮、御停止之事

但シ日数之義ハ追而相達候

一普請・武芸者、御当日の日数七日御停止之事

右之通心得違無之様、支配切銘々屹卜可申触候事

右廿九日御通棺ニ付、問屋前江出張候事、委細者別帳に委し

六〇

口上覺

木村伝六

天明三卯十月の御合力粉被下置、寛政三亥年迄九ヶ年被下置候

寛政四子年中、半御借上ニ御座候

同五丑年の五分一御借上被 仰付候而、当申迄八ヶ年被下置候

右者御町御役所様へ御尋ニ付、同役一同書上申候

寛政十二年申九月

六一

佐野藤衛門殿、今日奥御番頭御役替、右跡御町奉行戸田銀

次郎殿被 仰付候間、其旨相心得、例之通御両所へ御祝義申上候様、可相達候、已上

十月九日

右早速御祝義申上候

六二

乍恐口上書を以奉願上候

一步行夫役共江裏町通步行夫式拾人、先達而御内意奉申上、暫之内、御見済ニ而請取居候所、裏町通之義も連々困窮仕候上、去年中両度之類焼ニ而、甚難渋仕申候間、去暮中御願申上、右請取為相止メ申候所、左様仕候得者、右步行夫役共難義ニも相聞申候間、右式拾人積り、御救金奉願上候所、御慈悲之御了簡を以老人江金三分式朱宛被下置、一同難有仕合ニ奉存候、尤右式拾人、御見済之分、為相止メ申候得者、当年者格別、步行夫廻りも薄ク相成、裏町一統之御救ニ罷成、難有仕合奉存候、又候当暮も右之振ニ取扱申上度奉存候間、何卒右步行夫役共江、去暮之通御救金被下置候様、我々一同奉願上候、願之通被 仰付被下置候ハ、裏町通者尚更、我々共迄一同難有仕合ニ奉存候、以上

申十二月

石田庄三郎

木村伝六

御町御役所様

右十二月廿四日ニ指出候所、右三人江金式分宛被下置候様、御達ニ而、則御救金帳へ仕出ニ而、為戴候事

六三

〇十一月十六日御達シ

此度年号

享和与改元被 仰出候旨、御達シ有之候条、其旨御心得、支

配切銘々可申達候、以上

酉二月十六日

六四
○(朱)一馬式疋

右者、論所地改手代内田卯八・市川三郎、上総・常陸・上野・下野・陸奥・越後国江指遣候間、道中往返并彼地御用中共、書面之馬指出、賃錢請取之可継送者也

酉二月 下野

御用ニ付無印形 左近

右宿々

村々問屋

年寄
名主

御証文

一馬式疋

外人足式人 但山駕籠壹挺

右者就御用、常州信太郡余郷村今昼時出立、奥州岩城郡下神谷村迄罷越候間、別紙御証文写之通り相心得、書面之人馬指出、無滞継立、川場止宿等無指支様取計、此先触少シも無滞滞、右村方へ可相届候、以上

論所地改手代

酉五月廿五日

市川三郎
内田卯八

木原村 眞津村 綱村

廿五日泊土浦 廿六日泊水戸 廿七日泊介川 廿八日泊上田

平夫 下神谷村迄

右宿々村々

問屋
年寄中
名主

一上総・常陸・上野・下野・陸奥・越後国迄、為論所地改、御手代内田卯八郎・市川三郎様、明六日昼九ツ時、江戸御出立被成候ニ付、御勘定所御奉行菅沼下野守様・石川左近将監様御連印御証文御写壹通、御用書付壹通、箱ニ入被遣候間、則指越申候、先々無滞相届、馬急度用意可有之候、已上

酉四月五日

大伝馬町年番

御伝馬役印

從千住、上総国周准郡北子安村 名主 問屋 中

一御証文写壹通

一御先触壹通

一御用状壹通

一御伝馬役 添書壹通

四通 箱ニ入

右五月廿六日午下刻当着、即刻枝川江遣ス

人足壹人 裏四町目 長三郎

一論所地改手代、近江屋仁衛門所へ泊り、人馬共ニ賃付ニ而指出ス

六五

○^(奉)一五月晦日鈴木石見守様御登ニ付

馬四拾五疋 外ニ貳疋

内拾五疋 上御町

右之通指出シ濟 酉五月晦日

六六

○^(奉)一酉五月廿九日、小田切土佐守様御組中村金衛門殿・片山

門左衛門殿并供兩人都合四人、御用ニ而来候由、参候間、本
式町目嘉兵衛所江宿申付候事

右同心衆之問屋御呼出ニ付、三郎衛門罷出候所、鯉淵九兵衛・

湊小重兩人江御用有之ニ付、呼出呉候様被申候ニ付、右之段御

役所大和田小八郎様へ、御内意申入候処、夫之御町同心清水文

藏殿懸り内々被 仰付取扱候、尤九兵衛・小十兩人呼出ニ相成

候節も、問屋代三郎衛門同道ニ而、宿嘉兵衛所へ罷出候、猶又

鯉淵九兵衛方之証文指出候所、未印三郎衛門致シ申候、証文下

書別紙ニ有り

一人足六人

一馬 貳疋 右、中村金衛門殿・片山門左衛門殿、今六月二日夕出立ニ出ヌ

覚

五月廿九日夕之六月二日迄

一白米六升

代鑑六百元

御上下四人様分

一同貳百拾貳文

外

一六拾四文

ノ八百七拾六文

御老人御木錢米代

右者当町江御止宿被遊候ニ付、書面之通木錢・米代御払被下置、
慥ニ奉請取候、已上

酉五月二日

水戸問屋

木村伝六

小田切土佐守様御組

中村金衛門様

片山門左衛門様

御家来衆様

右木錢・米代請取候而ハ迷惑致ニ付、問屋之御役所様江申上候
処、壹人前式百五拾文積リニ宿之願出候様ニと御指図に付、左
之通

五月廿九日夕之六月二日迄
一三貫文

御上下四人御賄代

内八百拾六文

木錢米代御払

引

ノ貳貫百八拾文

右者小田切土佐守様御組、中村金衛門様・片山門左衛門様并御
供式人、上下四人御賄仕出書上申候、已上

本式町目宿 嘉兵衛

右之通本式町め支配之願出候事

一小田切土佐守様組之衆之三郎衛門方江、文通左之通

追而出役之砌、其御地ニ而取置候証文印形之義者、此方ニ而消印致候間、其旨小十・九兵衛、宿村役人中へ御申渡可被下候

以手紙致啓上候、残暑ニ御座候得共、弥御安全ニ被成御勤仕奉賀候、然者江戸鮫ヶ橋谷町欠落致候善五郎義、其御地中湊町小十・鯉淵村九兵衛方へ立廻り候風聞ニ付、拙者共出役致候処、右善五郎義、此方ニ而召捕申候、依之以来心付候ニ不及候、小十・九兵衛并両人之者、宿村役人中へも、右之段貴様御申渡可被下候

一鴨志田伝五郎殿・清水文蔵殿江も、右之趣別段ニ不申遣候間、先達而彼是厚御世話被下候御礼、宜貴様御申達可被下候、奉頼候

右一件ニ付、貴様ニも日々旅宿へ御出、彼是御骨折御大儀千万奉存候、御世話共ニ相成、忝次第奉存候、絹屋嘉兵衛江も、御序よろしく御伝声可被下候、奉頼候、以上

七月廿四日

組河原三郎衛門様

中村金衛門
片山門左衛門

右書状之表

水戸本三町目

小田切土佐守組

問屋
組河原三郎衛門殿

中村金衛門
片山門左衛門

西七月廿四日出

覚

一江戸町御奉行小田切土佐守様御組御役人中へ、水戸本三町目迄御指遣候御用状巻通差立申候、道中無滞様、早々可被相届候、已上

御伝馬役

西七月廿四日

高野新衛門

千住宿へ水戸本三町目迄

右宿村問屋中
名主

覚

公儀御伝馬役へ之添簡返之義、別紙之通り、此方へ致添書、名前江印形いたし、繼返シ可申候、以上

七月廿九日

尚々江戸へ之書状者、追而返進可申候、以上

本三町目三郎衛門 大和田小八郎

小田切土佐守様御組中村金衛門様・片山門左衛門様より、私方江御用状巻通遣ニ相届申候、仍而御伝馬役衆へ之御添簡返進仕候間、江戸南伝馬町御伝馬役衆迄、宿々無相違御添簡御届ケ可被下候、以上

水戸本三町目

問屋代

西七月廿九日

組河原三郎衛門印

水戸へ千住迄

宿々御問屋様中

右之通為相認、七月廿九日夕、四町め詰夫東次衛門下男ニ遣ス

一人足三人 過人式人

御普請役

六七

覺

右者内田屋藤衛門所江泊り

渡部新衛門

馬壹疋、從江戸蝦夷地迄上下、并於彼地御用中幾度も可出之、

是ハ蝦夷地御取締御用ニ付、御普請役渡辺新衛門罷越候付而相

渡者也

覺

享和元 對馬印
酉十月

右宿中

一米壹升五合

御上下御三人分 石代

此代残百三拾五文

但所相場壹升錢八拾七文

一錢六拾九文

木錢

外ニ式拾四文

御茶代

式百三拾壹文

一本馬壹疋

一賃馬輕尻壹疋

一同人足三人 但駕籠人足

右者蝦夷地御取締為御用、明五日期五ツ時江戸出立、其宿々通

行致、罷通候条、別紙御証文之写シ披見之上、書面之人馬用意

致、賃人馬之義者、御定之賃錢請取之、繼立可被申候、且渡舟

有之候場所ハ前後申合、是又指支無之様可被取計候、以上

十月四日

渡部新衛門

泊り松戸 同若柴 同府中 同水戸 同介川

泊り平潟迄 右宿々 問屋 年寄中

追而上下三人罷越候文言、例之通り外ニ御伝馬役ハ添書壹通

三通 但白木箱入

右先触裏町嘉十二遣ス

一馬式匹 内壹疋伝馬石町ハ出ス

一人足三人 過人式人

御普請役

渡部新衛門

右者内田屋藤衛門所江泊り

覺

一米壹升五合

御上下御三人分 石代

此代残百三拾五文

但所相場壹升錢八拾七文

一錢六拾九文

木錢

外ニ式拾四文

御茶代

式百三拾壹文

右者蝦夷地御取締為御用、御通行ニ付当宿へ被成御止宿、御定

之木錢・石代ハ所相場を以御払、慥ニ奉請取候、尤有合之品を

以一汁一菜之外、輕キ品ニ而も聊御地走ケ間敷義不仕、宿人目

少シも相懸不申、御召仕ニ至迄、御悲分成義毛頭無御座候、為

後日印形指上申候、以上

西十月九日

水戸宿 御宿 常衛門印

問屋

木村伝六印

右御普請役渡部新衛門殿、内田屋常衛門所 止宿ニ相成候処、

御用之義有之問、問屋ニ罷越候様申来候間、代三郎衛門早速罷

出候所、如何致案内ニ罷出不申候哉、脇宿ニ而者我等罷通候節

ハ、案内ニ宿役人罷出候処、無其義段、甚以不屈之由ニ而、悉

ク立腹被致候、依而三郎衛門何連ニも挨拶相成兼、直ニ罷立、

幸御役所小林市衛門様御通り御座候故、右立腹之趣、委細ニ申上候所、何レニも先触等之寫指出候様、其上ニ而了簡可致由ニ付、先触等之寫伝六様指上候処、其許罷越渡部新衛門江対談致候様被仰付候、尤是迄右等江案内指出不申趣、相答候様ニと御指図御座候間、罷越御家来江申入、新衛門殿江対談致候処、先刻も代之者江申聞候通、如何之次第ニ而案内指出不申、其上止宿ニ相成候処、宿も案内ニ罷出旁以鹿抹之致方、此義如何と申聞候間、伝六相答候者御尤ニハ御座候得共、先年御代官様猶又御役柄様等、御通行も御坐候処、是迄案内仕候義、無御座候故、聊御鹿抹申上候義ニ而、御案内指出不申候義ニ者無御座候、外ニ意味無御座候、弥是迄指出不來候哉、乍去止宿之節ハ、宿屋案内者可致筈、万一横町或ハ夜ニ入候節者甚夕指支ニ相成候、此義者如何と御座候故、相答申候ハ御尤至極ニ奉存候御止宿ニ相成候節者、宿屋表江罷出居候様、屹ト申付置、御通行御見掛ケ申候ハ、御宿仕候趣申上候事ニ御座候、左様ならば是迄案内不指出、猶又宿屋も案内ニ罷出段、委ク書付ニ致指出候様被申候、御尤ニ者御座候得共、書付差上候義者、支配役所江申立候指上可申候、役所トハ町奉行衆かと御座候間、左様と相答申候所、左様ニ而者、彼是手間取可申候間、其義者用捨致可申候、乍去止宿之節ハ、宿屋か馬指等ニ而も案内ニ指出可然とし、承知仕候由ニ而相濟、誠ニ今晚者其許呵候義ニハ無之、余国之取扱振を申聞候事ニ候間、其許も心ニ不持、拙者も此席切と御座候事、長岡駅ニ而も案内ニ罷出候由ニ而、是又立腹御座候間、問屋社人之召連、同夕罷越候所、是迄之通指

出不申相濟候、扱々六ヶ敷人なり

六八

下御町

○^朱

問屋共江

一往來人馬之義、風雨ニ不限無遅々可指出候、たとへ先触無之分たり共、差支無之様可致候事

一近頃歩行夫役・馬指之者共、人足等致帶刀候、対旅人江不敬之致方共有之由粗相聞、不屈之至ニ候、已來右等之義無之様

問屋共屹ト可申付候、若不相用もの有之候ハ、糺之上咎

メ申付候条、其旨相達置可申事

右御達シ之儀、享和元年酉十一月十九日、伝六呼出之上被仰付候事

六九

○^朱

口上覚

一往來人馬繼立之儀、人馬何疋何人繼立、余者繼立不申候義も有之哉之旨、此度御尋ニ付、先規ハ繼立候義、左ニ申上候一詰人足之儀、先規ハ日々四人宛、本町ハ為詰不時之御用在之節、召遣イ申候処、老宛も相減申候ハ、御町之為ニも罷成奉存候ニ付、未暮中奉窺、申正月中ハ三人宛、日々為詰メ申候、猶又先触御座候分ハ、裏町通ハ寄置繼立申候、先触無之不時往來之分ハ、日々本町ハ為詰申候人足江申付、何人ニ而も繼立申候、尤其節御用向指支無之様、本町・裏町之無

差別、間を合繼立申候義ニ御座候

一馬之儀、往来御家中都而先触有之分ハ、寄置繼立申候、先触無之不時ニ往来之方々も御座候所、是ハ御町ニ罷有候役馬江申付、何疋ニ而も繼立申候、尤火急ニ申付候義故、刻限之義、其節ニハ遲早之義者御座候得共、最早出弘人馬繼立テ罷成申候義者、無御座候

右此度繼立之義御尋ニ付、先例ハ取扱振書上申候、已上

享和元年酉十月 木村伝六印
御町御役所様

七〇

○^朱同役桑名重郎衛門義、御郡方勤被 仰付候間、此段為心得相達候、已上

享和二年戊 三月廿四日 小林市衛門

七一

○^朱今日、近藤五三郎殿御徒頭被 仰付、右跡御町奉行雨宮又衛門殿被 仰付、并杉山策兵衛御町方勤被 仰付候間、其旨相心得可申候、已上

同戊 五月九日 小林市衛門

尚々右ニ付、例之通御町奉行衆江御祝義ニ罷出候様、可相達候、已上

七二

○^朱今日、小林兵十郎、御町与力被 仰付候間、為心得相達候、已上

同戊 五月廿一日 小林市衛門

七三

○^朱此度平野郷藏口書ニ転役、此段為心得相達候、已上

同戊 六月十一日 小林市衛門

七四

○^朱一私義、来廿二日、方野州大田原辺江、商用ニ而罷出申度奉存候、日数三十日程御暇被 仰付被下置候様奉願上候、以上

同戊 七月廿日 木村伝六

御町御役所様

七五

○^朱御用之義有之候間、明十七日四ツ時御評定所御役所江、御出可被成候、已上

八月十七日 木村伝六殿 加藤善九郎

尚々、未御留守之由申立候処、可然者名代ニ指出候様ニと御達御座候、已上

軍司太郎治

小林弥市
江幡次郎衛門
木村伝六

其方共旧家勤功等も有之者共二付、格別之儀を以、此度御町年寄役見習ニ申付候条、年寄共申合、御用向諸事入念綿密ニ可相勤者也

但格式、可為是迄之通事

右之通御達、尤問屋役等ともニ、都而是迄通相勤候様御達事

七六

○一 梶昌慶左本老町目御会所ニ而借宅致候所、馬当テ遣申候

付指出候而、宜有之哉之旨、御役所江相伺候所、左之通御達シ、梶昌慶方々馬指出候様、申来候由之所、旅宿ニ罷在候と見通シ差出候様、御達可有之候、以上

享和貳戌 十月三日 木村伝六殿 大和田小八郎

七七

○(朱) 戸田采女正殿々三阿弥を以、御城付共江一紙ニ而御渡御書付之写し

此度日光道中并 御成道、水戸佐倉通り宿々之内、水難之分、当戌十月々来ル寅十月迄五ヶ年之内、人馬賃割増錢、左之通可請取旨申渡

日光道中

去ル未正月々来ル辰ノ十二月迄十ヶ年之内、 千住宿

人馬賃錢壹割五分増申付候所、証文此度壹割五分増、都合三割増

同断之所、此度三割増、都合四割半増
同断之所、此度二割増、都合三割半増

同断之所、此度壹割増、都合貳割半増

同断之所、此度五分増、都合貳割増

右之宿々割増錢申渡候間、可被其意得候
右之趣、向々江可被相触候

享和二戌年 戌十月
右之通相触候間、可存其趣候

水戸佐倉道

新宿
松戸宿

岩槻宿
大門宿

鳩ヶ谷宿
川口宿

日光御成道

栗橋宿
中田宿

幸手宿
野木宿

間々田宿

古河宿

松戸宿

粕壁宿

越ヶ谷宿

草加宿

戌十一月

七八

○十一月廿五日明ヶ七ツ時、八田御郡奉行白石又衛門様、御陣屋江御引越ニ付、歩行夫三人申来り候所、出刻延引ニ付、彼是御訴訟申上候所、御聞濟無之候間、右之趣早速ニ御町御役所様江も申上置候処、八田御陣屋江御断御座候由ニ而、歩行夫役共より口上書指出候留、左之通

口上覚

清水町内三間町

藤蔵店

忠助

蔵十

同町茂十店

新蔵

白石亦衛門様、八田御陣屋江引越ニ付、去月廿五日明六ツ時、歩行夫三人江刻限無間違罷出候様申付候処、刻限取違イ、明六ツ時御屋敷様へ罷出候由之処、御駕籠御残シ被成候間、御出立被遊候由ニ付、御跡江追付候而、随分御間ニ合可申敷之由ニ付、何卒、右御駕籠持送り申度由相願候所、御駕籠者御内人ニ而、御遣被成候、御近所御諸土様御残被遊候而、被仰付候ニハ、其方共之義者、御用相勤候分ニ可致候間罷歸り、問屋指遣候様ニと御座候ニ付、甚奉恐入奉存候付、早速新町蓮光院と申社人相頼、一両度御訴訟申上候処、此方ニ而者不相分候間、八田御陣

屋へ掛ヶ合候様ニと御座候付、廿七日ニ右三人之者共蓮光院同道ニ而、八田御陣屋へ参上仕、御訴訟申上候処、相濟不申候ニ付、廿七日相泊り、翌廿八日又々御訴訟申上候得共、不相濟罷歸り候由、依又候当月朔日、右三人蓮光院一同八田江参上仕、十計相尽シ御訴訟申上候得共、相濟不申罷歸り候由ニ御座候、此上重キ御寺院様ニ而も相願、幾重ニも御訴訟可申上由ニ御座候所、此度御札シニ付、何共奉恐入候得共、右之者共相尋、乍恐口上書を以奉申上候事

享和二戌年也 十二月

歩行夫役とも

尤当番藤兵衛也

十二月十一日、問屋代三郎衛門、歩行夫役藤兵衛、歩夫之者三人御呼出之上、三郎衛門御呵捨、藤兵衛三日押込、歩夫三人五日右同断

七九

○以手紙啓上仕候、然者当所伊左衛門かし焼失仕候ニ付、御城米大俵焼失ニ付、人足等指支候間、依而今日御町江通シニ御取扱被下候様奉頼上候、已上

十二月廿六日

枝川問屋

下御町御問屋様

庄兵衛

右之通頼来候間、（此處）況迄人足共ニ通シニ継立候事

八〇

○一馬指宇平願之上御免、跡台町忠吉十二月廿三日江召抱申

候取扱前々之通

八一

覚

○(朱) 一裏町廻り歩行夫遣イ高左之通り

一来亥年、当テ方前々之通歩夫役を以申遣候節、問屋場通帳江

町役人ニ而出人相記相渡、其時々通イ帳江致印形、尤壹人半

人之出人組合置、無相違取扱可申事

一歩行夫役ハ請取人江無構通帳面付之通り、其家々江宛通り

候間、出人等無間違、兼而指出候様、面々相心得可申事

右之通、来亥年歩夫当テ方之義、裏町支配々江御達シ被下置候

様奉願上候、尤前々も右之通り取扱候処、不行届支配も御座候

歟ニ而、御用向運兼申候間、依而此上取扱行届キ候様御達奉願

上候、以上

享和貳年戌十二月

石田庄兵衛
木村伝六

御町御役所様

右之通取扱方申出候処、御役所様御朱印被成候而、支配々江御

達シニ相成候事

八二

○(朱) 一人足五拾人

一馬式拾七疋

笠間家中

右者今昼九ツ時出立、奥州岩城中神谷陣屋迄、指急キ候義有之

候ニ付、継立次第夜通シ罷通候間、書面之人馬指出、宿駅無滞

継送り可給候、尤川々有之場所ハ、是又無差支様頼入存候、以
上 牧野越中守内

享和三年亥正月二日

西平左衛門

笠間大足、夫中神谷迄

右者亥刻大足ハ当着致候付、俄之通ニ候故、左之通本町裏町と
手わけ、人足共ニ無滞継立候事

一人足 拾人 台町 一同 拾人 八丁目

一同 拾人 下新町 一同 式拾人 裏町呼出シ

右者中神谷御領分内仁井町ニ百姓乱在之由ニ付、通り

一馬八疋 正月四日御評定所江

一同三疋 是ハ心掛ケ馬

一人足四人 右同断

右者牧野越中守様御領分岩城百姓乱有之候ニ付、

此方様ハも左之御方々様、御国境江御詰被成之由ニ付、御役所

様ハ右人馬被仰付候ニ付指出、尤馬八疋計御入用ニ而、心掛人

馬者相残候事

御先手物頭

宮田三郎介様

同

浅羽甚五左衛門様

御目付

中山庄司左衛門様

右之外御徒目付様方御出張

右之通御出張被成候ニ付、枝川迄無賃ニ而継立、尤追而伝馬に
相成、上下割物ニ相成候事

一笠間家中追々被帰候ニ付、人馬之義上町々指出候様 致度段、
左之通奉願上候

覚

一人足式拾老人 上御町

一馬 拾四疋 内拾疋 上御町
四疋 下御町

右者笠間御家中御泊ニ付、今廿二日夜八ツ時、問屋前江着仕候
様、被 仰付被下置候様奉願上候、已上

亥正月

石田庄三郎

木村伝六

右者正月二日夜過、急二人足五拾人・馬式拾七疋、下町々指出
シ置候付、此度上町江割合願濟
右人馬寄置候処、荒川御陣屋ニ而御指留ニ而通り無之由ニ付、
右之段御役所江相伺、人馬相返シ候事

一人足七人
一馬 七疋

上御町

右者笠間御家中泊リニ付、願出候処、願相濟申候事

一先月四日、御評定所江馬八疋指出候所、右之馬ハ伝馬ニ相濟、
内式疋分ハ上御町々出候由ニ付、左之通御役所江書付指出候、
尤残り六疋分ハ下町穀町々指出候様、相濟候事

覚

一三百人

伝馬式疋

右者正月四日枝川迄指出申候賃錢、上御町々出候分書上申候、

已上

閏正月

御町御役所様

木村伝六

石田庄三郎

牧野越中守内

西原忠左衛門

刀指 式人

中間 四人

上下七人

一人足五人

一馬 壹疋

右者先達而岩城一件ニ付、朝比奈弥太郎様江為御礼參候ニ付、
内田屋常衛門所へ着被致候間、右之段御役所様江も申出、尤二
夜泊り候ニ付、人馬共ニ付出シニ而、大足江継送り候事

閏正月九日着

(裏表紙)

佐藤五右衛門